

沙羅の樹文庫だより



新・東京駅遠景

東京駅 改札前 別れの時刻 告げる点滅
柱にもたれてる胸に包(くる)まって
ほんの数日前 ほら この場所で
止まない雨が降り続いている終着駅
赤色の大きなチェック柄のバックと
透明傘を邪魔そうに抱えてる
そんな仕草を探していたよ

東京駅 改札前 ほどける糸 ほころび笑顔
急ぎ足の流れの中に見つけて
空白の時間 結び合わせて
「ただいま。」って 引き寄せた瞬間(とき)
そっと添えた小さな手が 背中を包み込んだ

白い息をマフラーに隠しながら
「東京のほうが寒いね。」なんて 他愛もなく話し
少し鈍った感覚をとり戻すように
手袋同士で握り締めてる
二人でいること 隣にいること
あれから少し伸びた髪を「それもいいね。」って
撫でなら凍えた頬 ふたつ重ねて寄り添って
・・・後略・・・ (PEACEのシングル曲)

◆2012・文庫の後半の催し物◆

♪秋の夜長のおはなし会(

10月20日(土) 午後5:00~6:45(大きい人向け)
1部 詩(奈々子に)・お話(昔話:ジリコッコ
ラ・主人と家来)・語り(仏教説話:水たまり)
2部 朗読:(ねこ走る)&
(小僧の神さま)ーゲスト:吉川仲子さん
※小僧の神さま以外は、おはなし沙羅会員

✿屋下がりのひととき読書会✿

(好きな本についておしゃべりしましょう会 no.2)
11月18日(日) 午後3:00~5:00

★★クリスマスお楽しみ会★★

12月16日(日) 午前10:30~12:00
フルート演奏:内山洋子さん&伊藤楓音・颯岳姉弟
落語:片岡晴哉くん(予定)
そして
楽しいプレゼント交換・おやつ

☆☆今後の開館スケジュール☆☆

- ◆10月は通常 20日(土)、21日(日)
- ◆11月は通常 17日(土)、18日(日)
- ◆12月は通常 15日(土)、16日(日)
- ◆2013年1月は通常 19日(土)、20日(日)
- ◆2月は通常 16日(土)、17日(日)

※文庫の時間:土曜日は午後2時~5時、日曜日は
午前10時~午後3時

※毎月開館日の日曜には、「子どものための小
なおはなし会」があります。
午前10:30~11:00

《楽しんで読み聞かせ・頑張っておはなし》
おはなし・沙羅の勉強会は
毎月第3土曜 11:00~13:00

連絡先 沙羅の樹文庫 電話:0557-51-3737

文庫あれこれ◆と言えども、西村の月間報告になっているあれこれです。◆夕刻から激しく降り始めた雨もやんで、今朝19日は小鳥のさえずりが聞こえます。◆9月末の台風もこちらにはあまり被害がなかったようでよかったですね。その30日、本来なら中秋の名月に、私ども夫婦は風の盆ならぬ月の盆を味わいに、富山・八尾に行っていました。八尾は母方の故郷で、20年ほどまえ、風の盆(9月1日)に3人の娘と母の5人で見に行きましたが、足の悪い母には、町を流して歩く踊りにはついて行けず、気の毒なことをしました。でも、娘、孫娘との女だけの旅は想像以上に楽しかったようでした。さて、雨女でも男でもないはずのわが夫婦も台風には勝てず、町屋から観る筈が、月見どころか、土砂降りの町を歩いて曳山会館(八尾は春の山車祭りでも有名)で踊りを観ました。夫は二胡の音色がよかったとそれでも満足していました。(別紙にそのとき撮った写真掲載)

◆3日は誕生日だったので、新装開店なった東京駅ステーションホテル内バーで、名バーテンダー作るところのカクテル<東京駅>を飲むために3時間並びましたが、赤っぽいオレンジのグラデュエーションで女性にうけそうな美味でした。下記写真は東京ステーションホテルと丸の内南口風景です。◆私、遊んでいるのではないのですが、このあと、倉敷の全日本語りの祭りに参加してきました。倉敷には心をなごませるときが流れていました。◆ひとりで読書するのが好きな方には、そしておそばに幼いお孫さんがいない場合は特に関心はないと思いますが、秋は読書週間があり、学校ではおはなしや、よみきかせの会が開かれます。ここへ来る前の1週間はほとんど、学校へ行っていました。おはなしを聴くことになれている小学生は拙い話でもよく聴いてくれます。だからこそ、心に伝わるように、季節や自然、仲間への共感を感じられる絵本や、お話を届けたいものです。(西村)



10月に文庫に入ったこどもの本

絵本:『しろくまちゃんのほっとけーき』(わかやまけん作 こぐま社)『みつばち ひい』(北杜夫文 和田誠絵 フレーベル館) ※北杜夫遺作展(世田谷文学館)で見つけました。『ずどんといっぱつ』(ジョン・バーニンガム作 わたなべしげお訳 童話館出版)『みにくいあひるの子』(アンデルセン作 スペン・オットー絵 きむらゆりこ訳 ほるぷ出版)

以下3冊、ハロウィンの新刊絵本:『こうもりぼうやとハロウィン』(ダイアン・メイヤー文 ギデオ・ケンドール絵 藤原宏之訳 新日本出版社)『おおきなかぼちゃ』(エリカ・シルバerman作 SD シンドラー絵 おびかゆうこ訳 主婦の友社)『大食いフィニギンのホネスープ』(カンブリア・エバンズ作 川島誠訳 BL出版)『パヨカカムイ』(かやのしげる文 いしくらきんじ絵 小峰書店)『はくちょう』(内田麟太郎文 いせひでこ絵 講談社)『紙しばい屋さん』(アレン・セイ作 ほるぷ出版)『わたしが山おくにすんでいたところ』(シンシア・ライラント文 ダイアン・グッド絵 ゴブリン書房)

読み物:『アンナのうちはいつもにぎやか』(アティヌーケ作 ローレン・トピア絵 永瀬比奈訳 徳間書店)『世界一ちいさな女の子のはなし』(サリー・ガードナー作 三辺律子訳 小峰書店)

『かはたれ』(朽木祥作 福音館書店)『K町の奇妙なおとなたち』(斎藤洋作 森田みちよ絵 偕成社)

『クリスマスのりんご』(ルース・ソーヤー。アリソン・アトリーほか文 福音館書店)

『ニルスの出会った物語3. 4』(セルマ・ラゲルレーヴ原作 菱木晃子訳・構成 平沢朋子絵 福音館書店) ※1. 2は既に在庫

『サースキの笛がきこえる』(エロイーズ・マッグロウ作 偕成社)『ミナの物語』(デイヴィッド・アーモンド作 山田純子訳 東京創元社)『七つのわかれ道の秘密上・下』(トンケ・ドラフト作 西村由美訳 岩波少年文庫)『ミラート年代記2. 3』(ラルフ・イーさん ラルフ・イーサン作 あすなろ書房) ※request

『南総里見八犬伝 1~4』(滝沢馬琴勉作 浜たかや編著 偕成社) ☆ほかにたくさん入りましたよ☆

10月に文庫に入った大人の本

『つるかめ助産院』(小川糸著 集英社)
『水のかたち 上・下』(宮本輝著 集英社)
『四重奏カルテット』(小林信彦著 幻戯書房)

『マーチ家の父—もうひとつの若草物語』(ジュラルディン・ブルックス著 武田ランダムハウスジャパン) ※文庫本、本書でピューリッツア賞受賞
『北壁の死闘』(ポブ・ラングレー著 創元推理文庫)
『本の本』(斎藤美奈子著 ちくま文庫)
『さよならドビュッシー』『おやすみラフマニノフ』(中山七里著 宝島社文庫) ※寄贈

『永遠の故郷 夕映』(吉田秀和著 集英社)
『宮沢賢治の世界』(吉本隆明著 ちくま書房)
『作家魂に触れた』(高橋一清著 青志社)
『細部にやどる夢—私と西洋文学』(渡辺京二著 石風社)
『思い出の青い丘—サトクリフ自伝』(サトクリフ著 猪熊葉子訳 岩波書店)

『日本人は何を考えてきたのか 明治篇』(NHK取材班編著 NHK出版) 『評伝 ナンシー関』(横田増生著 朝日新聞出版) 『原発の、その先へミツバチ革命が始まる』(鎌仲ひとみ著 集英社)
『藤森照信の茶室学』(藤森輝信著 六曜社)
※以上4冊 request

『辺境で診る 辺境から見る』(中村哲著 石風社)
『東京大空襲の傷あと・生き証人』(鈴木賢士著 高文研) ※寄贈
『3.11 後の放射能「安全」報道を読み解く』(影浦峯著 現代企画室)

『学校司書たちの開拓記』(五十嵐絹子、藤田利江編著 国土社)
『めぐりあう花、四季。そして暮らし』(節子・クロソフスカ・ド・ローラ著 角川マガジズ) ※寄贈

10月に読んだ本についての感想

2012年10月16日 By 森林浴

ポプラ社の「100年文庫」100冊から。

30「影」の

ロレンス「菊の香り」「チャタレー夫人の恋人」で一躍有名になった作者だが、出身の炭鉱労働者の生活を活写。夫が坑内で事故死、その妻のけなげな夫の遺体の受け入れ。内田百閒「とおぼえ」背筋が寒くなるような怪談。うまい落語を聴いているような流麗な文章。永井龍男「冬の日」さすが短編の名手。巧い。死んだ娘の亭主とデキテしまった44歳の女。すべてを娘の亭主と孫と新しく来る嫁に譲って遠くに去ろうとして片付けている古い家に、老いた畳屋が来て仕事している年の暮れ。(畳屋父子の話は全く傍流の挿話なのだが、意外とよく利いている。)人生のやりきれなさが見事な構成・文章で書かれていてただ感嘆。

46「宵」の

樋口一葉「十三夜」24歳で亡くなった一葉の佳作。まるで新派の芝居の舞台を見ているような生き生きした流麗な文体。まさに天才だ。国木田独歩「置土産」誰もが自分の与えられた間尺にはまって静かに暮らしていた時代の庶民の暮らし、気持ちが書かれている。森鷗外「うたかたの記」ドイツ留学時代の題材での三つの作品の一つ。ミュンヘンで日本人画学生がモデルの美少女と数奇な体験をする。ミュンヘン近郊の湖で美少女が溺死、たまたま同じ場所で国王も溺死する。昔ミュンヘンで近くの美しい湖に行ったことを思い出した。

『戦争はなぜ起こるか』佐藤忠男 2006年7月第7版

子供でも分かるように親切に分かり易く解説してある。時も時、日本と中国の関係のところが特に興味を引く。これでは簡単すぎるけれど。

私のおすすめの本をどうぞ No.4

『ことろのばんば』(長谷川摂子ぶん、川上越子え、福音館書店)

去年の秋、親子読書地域文庫全国連絡会の交流会で藤田浩子さんの講演をうかがいましたところ、「アピラウンケン ソワカ」というおまじないの話しが出てきました。年配の方はご存じのようですが、たとえば犬のウンチを踏んでしまった時に3回唱えると、その穢れがとれるというおまじない。それ以来、力強い説得力をもった「アピラウンケン ソワカ」の音が、気になって仕方ありませんでした。「エンガチョ切〜った」に近いのかなあ？と調べてみますと大日如来の真言で「阿毘羅吽欠娑婆呵」の字にたどりつき、「怪我を治す。災いを防ぎ、魔を退ける」といわれていることがわかりました。

そういえば「チチンパイパイ」(出所は春日局の「知仁武勇、御世の御宝」とのこと)はもちろん、お話に出てきた「アブラカタブラ」とか「ビビデバビデブウ」の魔法の呪文も、かつての私になにがしかの力を与えてくれていたことを思い出しました。ちょっと大変な時、「アピラウンケン ソワカ」とか口ずさんで難を逃れてみたいものです。

『ことろのばんば』(長谷川摂子ぶん、川上越子え、福音館書店)は、秋の森が舞台です。山の奥に住む「ことろのばんば(子どもを捕って壺の中に集めている婆さん)」にお兄さんを捕られてしまった女の子は、山の神様たちから智恵を授かりながら、深い森の中をひとりで救出に向かいます。川の神様に教えてもらったおまじないは「アピローケン ビサラバ カクルル ソンジャ」。さて、これは何の呪文でしょう？

無垢で勇敢な女の子、じいさんの注意を聞かないのですぐにつかまってしまったお兄さん、気弱な年寄りのじいさん、そして子どもたちを小さくして大切に壺の中に隠しているばんば。どの登場人物にも心が寄せられます。

『きよだいな きよだいな』、『めつきらもつきらどおんどん』の長谷川摂子さんの昔話。秋も深まる頃、伊豆高原の落葉する木々の香りの中で読むと、ばんばの住む森につながってしまいそうな一冊です。(にしむら ひろこ)

★山の秋を知らない東京の子どもたち5年生に、この絵本を読みきかせしました。けっこうイタズラ好きな男の子もなぜか、子どもたちに逃げられてひとりさびしく泣いている<ことろのばんば>に感情移入していました。絵作者の場面ごとの色の使い方がステキですよ。

(ワイワイ外野)

著者・長谷川摂子さんは、昨年秋亡くなりましたが、たくさんの絵本のほかに、高学年向き、短篇連作『人形の旅立ち』ほか、『家郷のガラス絵』『とんぼの目玉』など、私たちおとなが帰りたくなる懐かしい子ども時代へのエッセイを残しています。(文庫にあります)

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

『The Road ザ・ロード』(コーマック・マッカーシー著 黒原敏行訳 早川書房 2008)

どこまで行っても太陽が厚い雲に被われた世界を、ショッピングカートにできるだけ多くの生活必需品を詰め込んで、父と子は南をめざして行く。その道々に親子を襲う人々。その人もまた食べ物を探して彷徨っている。危険から子を守る父は弱者を切り捨てる。心やさしい子はそんな父のやり方に心を痛めだんだん父への愛情が冷めてゆくが、父は自分が亡き後、子が強く生きてゆく術を教える……。

極限に至る時の子に対する父の愛情が切ない。いつかこの地球もそんな日を迎えないとは言えない。

『朝のひかりを待てるから』(アンジェラ・ジョンソン作 富永星役 小峰書店 2006.9)

私たちから見れば、まだほんの子どもに過ぎない少女が妊娠し、子の父となる少年との間に心のずれ

が生じてゆくなかで出産のときを向かえる。そして大きな悲劇が……。

『天使のすむ町』(アンジェラ・ジョンソン作 池上小湖訳 小峰書店 2006.5)

上記の『朝のひかりを待てるから』で、主人公だった少年が父となり、育った場所から遠く離れた土地でいろいろな人の助けを借りてひとりで赤ん坊を育ててゆく。初めに前書を読んでいるので、この本を読むと光が見えて少しほっとする。ただし、かれはこの本では脇役にまわり、主人公は少女。何の悩みもなく4人家族のなかで幸せに育ったと思っていた少女は、その父、母、弟と血のつながりがないことを知る。本当の父は、母は、私を……。

『田舎暮らしの猫トビー・ジャグとすごした英国の四季』(デニス・オコナー著 マクマーン・智子訳 武田ランダムハウス・ジャパン 2011.7)

吹雪の夜、助けられた黒い子猫はトビー・ジャグと名付けられ、カレッジの教授との生活が始まる。英国の自然豊かな環境と、一般のOLでも郊外で馬を持てる生活がなんともうらやましい。

『チボの狂宴』(マリオ・バルガス・リョサ著 八重樫克彦・由貴子訳 作品社 2011.1)

1961年5月ドミニカ共和国で31年に及ぶ圧政を敷いた独裁者トダルヒーリオの暗殺計画とその後の混乱する国の姿が、さまざまな登場人物の視点から描き出されている。

読み始めは登場人物の名前が耳慣れず、何度もやめようと思ったが、我慢して読み進めていくと、現在のリビアのカダフィ大佐、エジプトのムバラク大統領、シリア内戦……など、国の変革がよりいっそう理解できる。2010年ノーベル文学賞受賞・

『ナミヤ雑貨店の奇蹟』(東野圭吾著 角川書店 2012.3)

著者当人が「一か八かの大勝負でした」と書いている通り、いままでの本とまったく違って、タイムスリップする不思議な世界あり……、この勝負、著者の一方勝ちでした。(森川 理恵)

ブックトーク「妻に先立たれたとき夫は・・・」

私たち高齢主婦は何人が集まれば「一人残された時の心配」を語り合っています。夫どもは先に逝くものと決めていたりするものですが、世の中そうとうまくはいかず逆になる場合も多々あります。

私自身は歌は詠みませんが、月曜日の「朝日歌壇」を開くのはとても楽しみにしています。大好きな一つを探したりします。今朝（10月1日）のそれは、「雷がとどろく夜は妹と 魔女や魔法の話して眠る」（松田 梨子）でした。この少女は中学生。この歌も4人のうち3人の選者に選ばれていますが、その感性には、いつもびっくりです。お母さんも妹の「わこ」さんも「歌壇」のご常連です。

そんな中で、「河野裕子」さんが亡くなった時は、追悼の歌がたくさん載ったのですぐにわかりました。大勢のファンがいらしたらしいので、気になっていました。それからしばらく後に、この本に出会いました。

河野裕子、永田和宏、その家族 著『家族の歌 河野裕子の死を見つめた 344 日』（産経新聞出版 2011.02 刊）

この一家も、ご夫婦、子ども二人、息子のお嫁さんも歌を詠みます。俳句に比べて、歌は日常の「感じたまま」を詠むので、どんな生活？何の趣味？病気？健康？などなど、いろいろなことが読者にわかってしまいます。この本の中でも、4人がどんな暮らしをし、闘病から死までをどのように受け止めたか、折々の歌をはさんで綴られています。みんながその歌を発表するので、隠し事ができません。歌を通して、相手の心が、その時何を感じていたかがわかってしまうのです。この本では歌詠み一家の幸せが伝わってきました。

けれども、この本ではわからなかった、家族のすさまじい生活が次の一冊でわかってしまいました。

永田和宏著 「歌に私は泣くだろう 妻河野裕子 闘病の十年」（新潮社 2012. 07 刊）

夫婦二人の旅行、数々の受賞、交友関係。そうした穏やかな日常とは別の、裕子の薬の副作用によるらしい、精神異常状態の日々。その壮絶ともいえる日々がさらけだされていて、大変な毎日だったのだなあと胸がつまりました。二人で死にたいと思う日もあったと言いつつ、それでも「彼女には私しか居なかった」と言い切る永田和宏の愛情あふれる介護が、歌を詠む彼女を支えていたのだと思いました。死の最後の日まで歌を詠み、傍でそれを紙に残した家族の日々は、やはり私には「普通じゃない」と思われましたが。

川本三郎著『君のいない食卓』（新潮社 2011.11）

これより先に「いまも、君を想う」が出て、評判になったのですが、（川本三郎は好きでしたが）その時は表題から「なんか軟弱で嫌だな」と思って読みませんでした。でも、この「食卓」は、とてもよかった！！食にまつわるエッセイが、彼女との思い出の味もちろんあるのですが、そればかりでなく、旅の思い出や、幼いころの味のこと、母や友人との食事の風景が描かれている中で、亡くなった妻の料理の話がさりげなく混ざっていて、心地よく読めました。そして、そんな食事風景がなくなってしまった寂しさが伝わってきました。私も残りの日々を意識するようになり、夫と「けんかした後で永遠に別れるようになると気持ちがよくないから、なるべくけんかはやめようね」と話し合い、それからけんかはしてません。どっちが折れても、たいしたことのないことばかりですから。

城山三郎著『そうか、もう君はいないのか』（新潮社 08.01 刊）

これはそれよりもっと前の本ですが、「妻に先立たれて、城山三郎もこんな本を書くのか」と意外な感じがしたのを覚えています。そうしたら、次々に

この手の本が出て、それもよく読まれているらしい・・・。

妻に先立たれて寂しい、妻がいてよかったと書かれているのが、この城山さんの本。川本三郎の本は「食」にまつわる話と読めば奥さんの話ばかりでないのが救われるし、永田和宏に至っては歌がすべてを語っているので、ちょっと普通の人には重いのかしら、ということはあるものの、奥さんに先立たれると、「男の人はそんなことしか書かないのかなあ」と思っていた1冊がありました。

小川恵著『銀色の月 小川国夫との日々』（岩波書店 2012. 06 刊）

これは、作家の妻が書いたのですが、妻を亡くして夫が書いた上記の3冊とは全然趣が違います。寂しいとも悲しいとも書いてありませんが、大切な人との大事な日々が、いくつかの短編に凝縮されています。作家の夫と別れたことをきっかけに生まれたものです。それは、本当にひとつのきっかけであって、作品は夫との日々を書きながら、この著者自身の内面の苦しみも伝わって、読者に問いかけてくるものがありました。夫の作家生活を支える立場にいてのあれこれが、「女って損だよな」みたいな（ことは書かれていませんが）、主婦どっぴりの昔の私が思い出されたりしました。何も残せない、何もしてこなかったけれど、今の穏やかな生活をしあわせと思っています。

（中西 景子）

★そう言えば、妻を亡くして自死した江藤淳は・・・。

男は、夫は、女は、妻は、その繋がれているところは何なのでしょう。中西さんご夫婦に見習いましょう。（わいわい外野）



富山・八尾おわら盆踊り